

伸び縮みする国ドイツ

池内 紀

こんにちは。早稲田には非常に思い出がありまして、この辺は詳しいです。1時間ぐらい前に着きまして、少し近所周りを歩いていました。学生の頃に都電側の鬼子母神に4年ほど住んでいまして、確か「復讐するは我にあり」という映画で弁護士が殺されるシーンがあって、その殺される弁護士の住んでいた隣のアパートにいました。好きな人が高田南町というところにいまして、ですからよく早稲田へ来て今川焼きを二人で食べたり、たいへん幼い恋人どうしてでしたから、この辺りはずいぶん歩きました。だいたいお金がないから歩くことだけだったですね。また数年して次の好きな人ができて、その方は戸山に住んでいて、戸山住宅という公団ができてますけれども。両方ともよく歩きました。そこの法鐘寺というお寺の中に小さい池があって、いまでも金魚が泳いでますけど、そこへ座ってよく話をしたものです。それを懐かしがりながら、少しおセンチになっていました。

今日はドイツ文学とのかかわりからお話しようと思います。

「伸び縮みする国ドイツ」というタイトルを掲げたのはいろんな意味を込めてでして、まず歴史的なことを少しお話します。

僕がドイツ文学を専攻して一番おもしろいと思ったのは、ドイツという国が得体が知れない、非常に小さなときもあればやたらに大きなときもある。それ以外に目に見えない地図があって、要するにドイツ文化圏という言い方をすれば、或いはドイツ語文化圏という見方をすれば、いま我々が見ている地図、それから歴史的な地図以外に、言わば目に見えない地図がある。そこのところの文化の層が非常におもしろいということが僕自身の体験にあります。いち応、地図を描きながらいきます。

僕はいつも、ドイツというのは紙のお人形さんが立っているように思っているんですけど、ここの胸のところにベルリンがあって、肩のところにハンブルクとブレーメンがあって、腰のところにボン、それから膝のところにミュンヘン、そんなふうに覚えています。これがいわゆる現在のドイツ統一という形でできあがった、みなさんご承知のとおりです。ただ我々の学生時代はこのドイツではなくて、この肩の半分から胸からお腹が随分遠い国でした。ちょうど下腹のところにドレスデン、ライプツィヒがあったわけです。

僕はいつもドイツを考えるとときに、国境ではなくて川を考えることにしています。というのはドイツの都市の大多数が川沿いです。もちろん川が物流の動脈だったからでしょう。こちらはライン川、それからブレーメンの方はヴェーザー川、それからハンブルクはエルベ川ですね。エルベはライプツィヒ、ドレスデン、さらにプラハの方にも通じますね。それから現在の国境がオーデル川で、それからナイセですね。ミュンヘンのイーザル川がや

が合わさってドナウ川に入っていきます。これが目立った川の地図です。僕はいつも川を考えて、ドイツの都市では川の役割がいかに大きかったかを思います。一度、マイン川、この川のちょうど合流点にあるマンハイムを歩いたことがあります。都市計画をやっている人といっしょに歩いたのです。それからカールスルーエ、どちらも人工都市です。18世紀の絶対主義なんて言われた時代に人工的に造られたのです。たとえばマンハイムでは王宮の前方が正方形に区切られていて、絶対王政の街造りが時代の考え方そのものを反映していて、王城が3階建てで貴族の館が2階建て、市民が1階建てで、ちょうどそのお城、領主がいるところを基点にして整然と身分制が成り立っている。カールスルーエはもっとはっきりしていますね。扇形をしていて、王城を起点にして、いわば都市全体が国家の基点である王の一点に収斂していく、そういった構造になっていて、こういう都市造りが18世紀にいくつかあった。どこも川を取り込んでいるところが、日本の都市造りとは違う点だろうと思います。旅をしていると、いわば網の目のように水の流れることに気がつきます。ハンブルクの下手のリュエネブルクという昔の鉱山、そこからリュエベックに運河があって、掘り出したものが直接運べるという構図で、重要なところには運河があります。だから水の流れるというのはドイツにとって大きな意味を持つと思っています。

僕らが育った時代、ドイツは腰と背中と足だけの地域でした。統一後はじめて自由に、胸と下腹が我々に見えてきたというわけです。ついこの間ノーベル賞をもらったギンター・グラスの経歴に、生まれはグンツィヒとあって括弧して、「(現ポーランド、グダニスク)」と出てきます。我々には感覚的にわかりにくいところですが、これはもちろんドイツの歴史でいえばつながっているのです。ドイツ統一をひとつ前にずらして1871年、ほぼ100年あまり前のドイツの統一の時にはこのドイツではなくて、歴史図なんかを開きますと、北に大きく伸びていますね。これがドイツであったわけです。プロイセンが指導してできたドイツの統一、要するに最初の統一であったわけで、厳密に言えば、つい先立っての統一は2度目の統一、再統一ですね。ただそう考えると、たいへん奇妙なことに気がつくわけで、ドイツの統一は異常な状態を正常な状態に戻した、と言われていますが、むしろドイツの統一が異常な状態を作った、という具合にもとれるのです。つまりドイツの歴史を見ていくと、ドイツがこういう統一した、伸びた国の形をとったのはほんのわずか、1871年からナチスドイツの崩壊の1945年までわずか70年あまりです。ナチスの時代の大ドイツ帝国はもっと大きいですね。一番伸びきった状態でしょうけど。つまり我々はドイツを考えると、統一された非常に大きな、いわば大国にあたるドイツは決してその正常な状態ではない、少なくとも歴史的に見れば、それは非常に例外的な状態であると言えます。それ以前は小さな形に分かれていて、世界史で大ドイツ主義とか、小ドイツ主義とか、統一をめぐる習った記憶がありますけれども、なぜ大ドイツ主義というのか、要するにそれほどいろんな領邦に分かれていたんでしょうね。そうしますと、小さな分かれ、地方自治の形でそれぞれが個性をもってゆるやかな連帯関係を作っている状態が、ドイツにとっては非常に長い歴史を持ち、大ドイツ的な統一されたドイツは例外的な存在である、ということが歴史の流れの中では言えるわけです。しかも、統一されたドイツになったば

かりに、いかにヨーロッパに災いをもたらしたかということも歴史を見ていくと気がつくわけで、大きなドイツは隣人にとっては脅威であり、第一次世界大戦、第二次世界大戦を含めてたいへん世界中に厄介なことを引き起こした国である、ということも歴史は無情にも語っているわけです。

ここから文学に少し入っていきますけど、ギュンター・グラスは、先ほどお話ししましたように現在はポーランド国内にあるダンツィヒの生まれです。僕はホフマンの短編集を一冊作ったことがあります。ホフマンはケーニヒスベルクの生まれです。ケーニヒスベルクというと、例の哲学者のカントが生まれて育って、あの人は終生そこから出なかったようですね。生まれ、育ち、そこで教え、カントがこの店の前を通れば何時何分だ、とわかるほど毎日びたっと決まった時間に家と大学と行き来して生涯を過ごした人ですけれども、ドイツ哲学というとカントと思い出す、その一番の人がドイツで言えば一番辺境の生まれである。あとで紹介しますが、「ケペニック大尉」というおもしろい劇があって、現在はベルリン市内ですけれどもかつては郊外だったケペニックでおこった、非常にこっけいな事件の主演を演じたヴィルヘルム・フォイクトという男、この人は文学者ではなくて文学者の素材になった奇妙なペテン師ですけれども、彼もこの生まれです。

僕はほかにヨーゼフ・ロートという小説家が好きでいくつか作品を訳しました。その人はウクライナのブロディという辺境の小都市の生まれです。もうひとりエリアス・カネッティという人に、30代の初めに熱中していて、その人のずいぶん厚い小説を訳したことがあります。ぜんぜん売れなかった本なのですが、かなりたってからたまたまその人がノーベル賞をもらったもので、少し売れて編集の人が、「池内さん、ノーベル賞ですからちょっとは売れますよ」と涙ながらに電話してきたのをよく覚えています。その人はブルガリアの生まれです。それからずいぶんカフカに熱中して仕事をして、これは現在も続けていますが、その人はチェコのプラハの生まれです。ついでに言うと、日本でとくに戦前から戦後のある時期まで、ドイツ文学が若者にとってある種、精神の入門書に当たる時期があった。その時の作家にリルケとかトーマス・マンがいます。リルケはチェコのプラハ、トーマス・マンはドイツ地図を人形の形に見立てた場合の肩のはずれ、リュベックです。ヘルマン・ヘッセはスイスに移った人ですね。

別にそういう人を選んで、というわけではないのですけれども、たまたま自分の仕事とか関心を含めて地図を描いて印をつけていきますとこんなぐあいになってきました。ドイツ文学という枠で考える世界は、どうも人形が手をあげたような国、このドイツの中だけにあるのではなくて、ドイツの文化あるいはドイツ語というものが文化を担っている世界、そういうものが作り上げてきた歴史は、もっと広いその外にある。外に広がっているように思うわけです。僕はこれをよく自分なりに、「ドイツの大きな三日月」と名づけています。バトル海から中部ヨーロッパを含んでアドリア海まで、大きな三日月形ができるからです。その三日月の中にドイツ文化の非常に良質のものがある。上質というと誤解されるかもしれないですけど、辺境であることによって、中央の伝統とか因習とか約束とか、そういうものを無視できる。辺境であることによって、既成のものにとらわれないし、自分

たちがかつて属したもの、あるいは属さなければならないものという強制をもたなくていい。つまり新しい文学というのは絶えずこの辺境から生まれてくるだろうという気がするわけです。あるいはそういうふうに見てきたわけです。ちょっと余談ですがけれども、南のほうのフランス本国に対して地中海を挟んだモロッコとかアフリカのほうですね。地中海を隔てたそこを仮に線をつないでいくと半月形ができるのではないかと思います。そこをクレオール文化圏と言うようです。そこから生まれた新しい文学を含めてクレオール文化という言い方が少し定着してきたのではないのでしょうか。非常に良い見方だと思います。ラテン文化にとってのクレオール文化というのは非常に大きな役割があっただろう。同じようにドイツ文化にとっての「三日月形」はたいへんおもしろい役割があったような気がします。それを我々はつい国境で判断して、例えばドイツ文学というとドイツという国を連想するし、チェコ文学というとチェコという国を考えがちですけど、それでは非常に文化を小さくしてしまふ。国境というのがいかに恣意的で時代によって違ってきたか、そういうものは文化を考える基準には決してならない。まずこの国境を消すことから始めていきたい。我々はいつ *Muttersprache* を「母国語」と訳します。日本語を我々は「母国語」とするわけですが、確かに日本の場合、国というのが海というはっきりした境界を持つものですから、国単位でいいやすいし、絶えず国を基準にして考え、国といったものを場合によれば非常に強調します。しかしヨーロッパを考える上では間違いであって、「国」はいらない、「母語」であって母なる言葉ってという言い方が正確でしょう。「母国語」っていうと非常に限られた国境内の言葉として捉えがちですけど、「母語」だと考えれば母の言葉とすると、うんと広がっていくと思います。それは歴史的にはハプスブルクの文化圏という形でドイツ語、あるいはドイツ文化が広がっていったところですから、ハプスブルク文化圏という形で捉えてもいいいんでしょうけれども、それはまた歴史に寄せすぎている気がするので、その *Muttersprache* にあたる「母語文化圏」っていう見方をすると割りとき自由に行き来ができるような気がするわけです。

具体的に作品について話していこうと思います。ひとつの例として今、トーマス・マンという名前を出しました。かつてドイツ文学をやるときの最初の大きな関門のようにして取り組んだ覚えがありますけれども、『ヴェニスに死す』という小説があります。あの小説はタイトルがあるから、当然ヴェニスに行って、美しい少年に中年男が夢中になって最後にはあの水の都で死んでしまうという小説なのですが、よく読むとおかしいですね。タイトルにヴェニスとありますから、主人公がヴェニスに行くのだと思うのですけれど、ヴェニスは偶然であって、小説の中ではヴェニスにいくつもりはなかったんですね。主人公はミュンヘンに住んでいる国民作家のような小説家、どういう小説かは紹介されませんが、おそらく非常に退屈な国定教科書に載るような小説を書いていた、そういう作家だろうと思います。そういう保守的な歴史作家が名誉を受け、爵位ももらいました。年は五十歳過ぎです。そこまではいいのですけど、彼の出身について出てくるところがあってそれを読んでいくと、父親はシュレジア、さきほどあげた三日月の先っぽに近いところ、シュレジアの郡庁所在地に赴任していた役人で、母親はボヘミア、やはり三日月のふくらんだ

ところ。その音楽関係の学校の学長の娘、要するに、父はシュレジアの役人であり、母は音楽家の娘、規律に細かい一面と芸術的な一面、両方とも持っているということでしょうね。そういう人物がミュンヘンで名を成し功を遂げた人としてでてくる、これが第1章です。それで、はやくヴェニスに行かないかと思うのですが、第2章でもまた延々と行かないんですね。第2章はミュンヘンでちょっとしたことがあって急に旅心がおこって出発する。そのときまずトリエステという三日月の下のはし、アドリア海の港ですけど、トリエステに行ってそこからイストリア、かつての保養地だった、そこに行くわけですね。そこで過ごすつもりでいた。行ってみるとホテルにオーストリアの大公妃が来てるもので、食事の時にやたら指図されてやっかいでしようがない、それでそこから逃げ出して、ヴェニス行きの船に飛び乗ったという、そこでヴェニスに行くという経過になります。あの小説を読んだ中で不思議に思うのは、どうして出身がこんなに詳しく書かれているのだろうというのと、どうしてヴェニスに行くまでがこんなに暇がかかるんだろうということです。それだけで半分近くを費やしているわけです。そこでヴェニスのリド、海沿いのホテルで初めてポーランドの貴族の少年と出くわして、そこで普通に言えば少年愛にあたるものが始まる。その後のことはお読みになればすぐわかりますけれども。中年過ぎて生命力をほとんど失った男がまったく未知の美にふれて改めて生きようと、理髪屋にいつてやたらに若作りをするところがあります。今一度の青春ですね。ゲーテの『ファウスト』ではファウストがメフィストと約束をして若返る、あれは賭けをしたわけですけども、「ヴェニスに死す」はその現代版で、美容術によって若返る、今一度青春を求めようとして、そこへ疫病が流行って、少年愛に殉ずる形で死んでしまうわけです。その前半のところ。彼は要するにドイツ圏を移動している、いまの三日月の中のシュレジアとかポヘミアとか、トリエステとか、イストリアとか、これはすべてある時期まではドイツ文化圏に属していたわけです。シュレジアというのは中心都市がブレスラウでやはり川沿いにあります。中世以来、ドイツ騎士団という形で植民され、ドイツ人が絶えず東へ東へ移動しながら国を伸ばしていった。ドイツの生活圏は、地図で言えば東方、上から右にかけて、非常に大きく膨らんだり縮んだりしています。その膨らんだ中で点と線のようにして維持されてきた文化圏があって、そのなかで主人公のアッシェンバッハという男が生まれ育った。これが小説の中で大きなモチーフになっている。いわば老人のシワを持ってきた文化が、非常に若い文化と遭遇して、新しく若返ろうと手術を施したあとに死んでしまう。ハプスブルク文化圏が長い歴史の末に老い朽ちて白髪とシワだらけになった状態で、それが第一次大戦で消滅してしまう。主人公の名前の「アッシェンバッハ」は「灰の川」といった意味ですね。死者の骨を流す川、Aschenbachはいわば死の男、死神を担った男だとすると、ちょうどその死に方が彼が担っていた文化圏の消滅のシンボルじゃないかと、そういう具合に小説を読むことはできないかという気がします。少年愛の物語としてなかなか面白いですし、ヴィスコンティの映画の中では作家が音楽家に変えられている以外は非常に正確に物語をなぞっていますからビデオでご覧になるとよくわかるとおもいます。その中で、トリエステの街とか出てくると思います。そしてその都市の造りをご覧になると明らかにイタリア

ではなくて、ドイツ文化圏の都市だというのが一目でわかります。ひとつの文化の証拠作品のようにして僕は読みました。

何年前かに『ぼくのドイツ文学講義』というタイトルで岩波新書から本を出しました。こう言うと宣伝くさいですけど、ケペニック事件について、そこに1章設けています。三日月の地図で言えば、一番先の細ったところ、東プロイセンというところに生まれた、フォイクトという、もともと靴屋をやっていた人だったようです。やはり第一次大戦直前にベルリン郊外のケペニックという、人口3万か4万くらいの町で起こった事件です。第一次大戦の少し前ですから、ドイツ陸軍が一番華やかな頃、軍隊の演習が終わって小隊が帰ろうとしているときに大尉が呼びとめた。「これから用があるから、指揮下に入れ」と。そう言って20人足らずの小隊をケペニックという町に移動させる、そして町の庁舎にいて、市長以下、今の助役に当たる人とそれから収入役ですか、それを逮捕する。金庫を開けさせてそこに入っていた有り金を全部袋に入れて押収して行く、という事件です。その小隊が市長以下をベルリンに連行してくるとそういう命令を出した覚えがない、第一、そんな大尉もいない、逮捕状も出ていない、まったくのペテンであることが判明するわけですね。ニセ大尉になった男が小隊を指揮して、小さな町に乗りこんで市長以下を逮捕して公金を横領した。もちろん警察が動いて似顔絵が出て捜索をするんですけども、なかなか捕まらなかった。というのは似顔絵の顔と、現実の顔とがまったく違っていたからです。似顔絵によればさっそうとした30代の太尉で、いかにも帝国軍人を絵で描いたような美男子が指揮に来た。全員がそう証言したので、そういう似顔絵が出まわったわけです。2週間近くして密告してくる人がいて、自分と同じく牢にいた男でいずれそんなことをやってみたいというのがいた、そいつに違いない。それはこういう男だ、名前がヴィルヘルム・フォイクトという、靴屋で現在失業中でベルリンにいるはずだ、こういう顔立ちでこういう特徴がある、50いくつで、しがない、しょぼくれた、歩くとがに股の男だったようです。そうやって逮捕されるんですね。木賃宿にいるところを逮捕される。事件そのものは非常にばかばかしいんですけども、その事件がいわば笑い話のようにして終わった後に、20数年経って、ツックマイヤーという劇作家がそれを劇に仕立てて1931年、ナチズムが非常に勃興してきた年に劇にして大当たりをとる、そこで初めてケペニック事件というのが、歴史的な事件としてではなくて、文学的事件として定着するわけです。これはドイツを考える上でおもしろい事件であったろう、と思っています。ひとつは軍服の力ですか、帝国軍人という軍服がいかにも人々を攪乱したか、小隊を率いてケペニックの町にきたときに、市長は当然、「どういう罪状なのか逮捕状を見せろ」と言った。すると大尉は「いや、これが逮捕状だ」と自分の軍服を指差した。これで押し通したわけですね。いかに軍服、制服というものが力を持って人々に威圧をかけたか、これは時代の力であろうと思います。人々が似顔絵を作るにあたって、およそ実体と違う男を証言した。ここには絵に描いたような見事な帝国軍人像が証言の中に出てきた、要するに人々は軍服を見ると同時に人物をまったくちがって見ていた、それも非常におもしろい現象だろうと思います。我々だって自転車の整理する人とか、工場の番をしている人とか、会社から派遣されて来ている人が警察

官と似たような制服を着ていますよね。それが護衛だとか、人に指図したり規律をつけるにあたって非常に有効である。制服が有効であるひとつの名残でしょうか。そういう時に我々は制服を見ていて、着ているご当人を見ていない。そのケペニック大尉の事件が1930年代の初めに文学に定着した。新しくナチスという制服が登場してきて、その制服の力がいかに脅威であるかをツックマイヤーはそれで述べようとしたのしょう。作家のモチーフのとり方として非常に正確だった。1910年代のたわいない喜劇にあたる事件を1930年代に持ってきたときには喜劇ではなくなった。そのことも当然おもしろいのですけれども、僕はそのペテンをした男にたいへん興味がある。東プロシアの生まれで、たえず中央から搾取される地域で育ち、辺境からどういう時代の動きであるかを眺めていた。三日月形がおもしろいというのは、そこから絶えず、観察する位置がとれる、そこからドイツというひとつの統一体があるとするとその動きを非常に冷静に見ることができる。内部にいれば正常であることが一歩外に出れば異常である、内部であれば悲劇であることが、外部から見れば喜劇である、要するに二重の目で見ることができる。ヴィルヘルム皇帝時代のもっともこっけいな事件がケペニック事件だとすると、ヴィルヘルム皇帝と同じ名前を持ったヴィルヘルム・フォイクトというペテン師は、ちょうどヴィルヘルム時代の一つの裏面、制服がいかに力を持っていて、すべてその制服でもってみようとしていた人間の視覚の奇妙な時代の歪みを、辺境の子であるからこそわかっていたんじゃないかと思います。貸衣装の軍服でもって大芝居が打てた。そのヴィルヘルム・フォイクトというのは横領した公金をほとんど使わずに逮捕されたので、軽犯罪ということで、しばらく刑に服してすぐに出てきた。なかなか知恵者がいるもので、ケペニック大尉の軍服事件をルナパークの芝居小屋で演じるときに、フォイクトに声がかかって舞台上で大尉役を演じていたようです。そこでまた官憲侮辱で捕まったりしてますけれども、たいへんおもしろい人です。ヴィルヘルム・フォイクトが、ちょうどヴィルヘルム時代といわれるドイツを象徴して逆のヴィルヘルムを描き出し、見事な喜劇でもって時代を批判した、そんなふうだと思います。

東プロシアというのはおそらく現在のドイツの人々から見ても古い過去の、強いて言えばお年寄りが懐かしむ、そういうところかもしれませんが、東に対してドイツという大きな国が絶えず広がっていったわけです。川で言いますと、ダンツィヒの横にヴァイクセルという川があります。現在のオーデル川、ナイセ川の国境をめぐって、ドイツとポーランドで確認し合ったのが、統一のときにもありましたが、戦後、かなりの時間が経ってもなお、国の最高責任者どうしが改めて会って、これが国境なんだということを念を押さなければならない、確認しなければならないほど絶えず東に広がっていく気配があり、可能性があり、また歴史があったのです。カントがいた、ホフマンが生まれたケーニヒベルクという都市は本当に古い、何百年も前からドイツ人が移植して自分たちで作り上げた都市です。行かれるとわかりますが、明らかにドイツの都市として作られています。一番端がたしかメーメルという川でメーメルという町がありますね。バルト海にリュージェン島という島があって、いまは国立公園になっていますけれども、あそこの端っこにいくとたいへ

んおもしろいのは、地球上の一番最初の姿があります。つまりあそこは風と波が非常に強いですから、ほとんど何も育たない地域が延々と広がっているのです。一方が削られて一方が堆積していく、地球の歴史で言えば、現実に陸地を創造する過程があそこで進行していて、僕はやはりドイツのひとつの象徴のようによく思うのですが、その北方のあたりの風景がダンツィヒを越えて、かつての東プロシアといったあたりの海岸線にずっと続いている。それぐらいに思えばいいと思います。そこから線を引っ張って行って、国境を越えながらバルト海からアドリア海まで緩やかな曲線を描いていくと僕自身が絶えずこだわってきたドイツ文化圏が見えてくる。さっき名前を挙げたもうひとりでいえばエリアス・カネッティという人、この人はブルガリアのドナウ川沿いにある小さな町の生まれです。どうしてブルガリアに生まれた人がドイツ語で著作活動をするようになったのかは、3部作の自伝を読むとよくわかります。ドイツ語はカネッティにとっては5番目ぐらいの言葉です。現実に行かれるとわかりますけれども、ドナウ川という川をドイツの源流から始まってオーストリアを越え、ブラティスラヴァだとか、ブタペストとかたどると一番わかりやすい。その川沿いに文化が広がっていく。カネッティが生まれ育った町もドナウ川の河川運航の港町です。当然、ドイツ船が行き来する。そこが黒海まで続く大きなベルトの拠点にあたるわけです。だから今でもブルガリア語、ルーマニア語、トルコ語、ギリシャ語、ロシア語、ドイツ語と、一日に何ヶ国語かが同時に使われ、同時に生きている。つまり先ほど言いました三日月の中は1言語で語り尽くせない。ちょうどギュンター・グラスのダンツィヒがドイツ語とポーランド語とさらにリトアニア語とか、ロシア語とかそれから少数民族といわれる人々の言葉とか、地域に数ヶ国語が同時に並存しているのと同じように、この地帯はたえず数ヶ国語が同時に並存している。カフカはドイツ語で書いていますが、彼は日常生活はチェコ語を使っていたわけです。カフカはサラリーマン生活をしていて人でプラハの役所から出張に行くことがよくあって、カフカが担当していたところがちょうど国境に近い北ボヘミアです。そのあたりから含めたドイツに近いところをズデーテン地帯といいます。歴史で言えば、ヒトラーが最初にズデーテン併合という形でそこをドイツの中に取り込んだ。いわば伸び縮みの伸びる最初の取っ掛かりになったところ。そこはちょうどカフカがしょっちゅう出張していて、彼が泊まったところがちょうどズデーテンを併合したときのナチス・ドイツの参謀本部が置かれたホテルだったりして、ずいぶんおもしろい。カフカという小官吏はそんなことを知らずに死んだわけですが、そこでも言葉というものがいつもひとつではなくて、比率を変えながら何ヶ国語かが同時に使われ、同時に生きている。つまりそれだけいろんな文化が並存する形で、それが場合によれば結合したり反発したり、重なったり、影響しあったりという。僕はいつも、新しいものはそういうところから生まれるという気がするんです。絶えずそういう状態で、新しいエネルギー、新しいプラン、新しいスタイルが、その重層した中から生まれてくる。そういう意味でドイツ語文化圏の三日月形をたいへん大切にしたいと思っているわけです。大切というよりは、もっともっと可能性を追求してみたい。

どうも僕は最近英語が世界語みたいになって、なんかドイツ語をやる人がとっても少な

いとか、もういまさらドイツ語なんて要らないんじゃないかと、本気で言う人がいたりしますが、それは非常に悲しい見方だと思うんですよ。さっきのカネッティを読んで言いますと、彼は毎日、数ヶ国語を絶えず身近に聞きつつ生活した人です。つまりお祈りに使う言葉、愛を語る言葉、自分の考えを述べる言葉、レストランで注文する時に使う言葉、そういうふう to それぞれ言葉の役割が違う、自分の中ではそれぞれ言葉が違うわけです。カネッティは自己表現、自分の一番大切な表現をする言葉としてドイツ語を選んだ。彼は亡命したユダヤ人です。38年にウィーンから亡命するわけですけど、亡命したのはイギリスであって生活では英語を使って、後にフランスにいったときはフランス語を話しました。

ぼくは英語が世界語になってきても構わない。それはホテルで使える言葉であるし、レストランで使える言葉であるし、最初の仕事を伝えるのにそれで伝えればよい。しかしだからこそドイツ語はとっても貴重だし、自分の読みたい知りたい考えたい、そういうひとつの自分の日本語以外の言葉としてはドイツ語を持っていたい。実用語は英語に任せてしまっていていいのではないか、そんなこと言うと英語の人に怒られるかもしれませんが、少なくとも英語が万能のような、それがひとつあればすべてができるというのは、大いなる錯覚、文化に対する侮辱である。さっきふれたクレオールなんかもその一つの参考にしているわけですけども、そういった中で言葉を仮に位置付けるなら、言葉というものに対する非常に微妙な問題にも触れることだろうと思います。

きょうは主にドイツ語圏の周縁部について話しました。周辺ばかり立てるのは偏見だと思われそうなので僕はいまゲートをやっておりますけれども、たいへんおもしろいです。ゲートは小さいとき、教育パパにすべてを教えこまれた人ですが、10代でドイツ語、英語、フランス語、イタリア語、古典語ができた。バイリンガルの世界ですね。イタリアに行こうとフランスに行こうとちっとも困らなかった。ゲートというちょっと重たい感じですけど、たいへん軽いところがある。その軽さを自分で制御しながら巧みに生きたという感じがします。10代にこういう広い母語圏に入るための言葉をマスターした上でそれでワイマールという小さな町に60年近く住んだ、そこをぜひ考えていただきたいという気がしますね。ドイツ本国のことをちっとも話さなかったですけども、それはきっとこちらの大学の授業のほうで話されると思いますから、それと合わせてぜひドイツ文学を読んでみて下さい。